

前置詞 En, A, Dans について

松 田 孝 江

1. はじめに

前置詞は、名詞や動詞に比べると、その脇役と見られるためか地味な扱いであったが、90年代以降、非常に研究が活発になってきた分野である。これまでつなぎ役として、局所的にしか論じられてこなかったものが、近年、文全体の意味を左右することもある重要な役割をはたしていると認識されるようになってきた。そうした研究をふまえて筆者は、“à / dans + 場所の名詞”について考察してきたが、à と dans にさらに en を加え、これら三種の前置詞のかかわり合いや相違点を、別の角度から検討したい。¹⁾

2. En, à, dans の空間的意味

場所を示す前置詞としては、à は点を、dans は空間としての内部を示す。en も内部を意味するが、dans とはイメージがまったく異なる。dans があくまで現実的・具体的であるのに対し、en は抽象的で、内と外との境界が dans ほど鮮明には感じられない。また、à は点として指し示すものであるから、一つの点を照らす意味では、具体的で dans に近い。しかしその具体性は被制辞名詞 régime の存在を明示するのみで、dans のように、一步ふみ込んで、régime を分析的にとらえることはしない。三つの前置詞の違いを大まかにとらえるとこのようになるが、三語がフランス語の歴史の中で、どのようなかかわり合いを持ったかを知ること、これらの相違点を理解するためには重要である。

3. En, à, dans の変遷と交錯

前置詞 en は古フランス語時代、à や de と同様に、後続の定冠詞との間で縮約が起った。en le は中世にまず el となり、el からさらに ou や on となった。複数でも en les から es ができた。しかしこれらの縮約形は、docteur es lettres のような例外を除き現代まで引き継がれることはなかった。単数形の ou, on は、綴り上からも au と混同されて16世紀半ばごろに姿を消すことになるが、複数形の es は、これより後の17世紀まで生き長らえた。こうして en の後では、l' と la および定冠詞以外の限定詞は保たれたものの、en le と en les の縮約形である ou, on, es は消滅して、au と aux に吸収されてしまった。その結果 au, aux は本来の à le / à les に加えて、en le / en les の役をも担わ

されたのである。だがこれは、文脈によっては意味解釈に支障をきたすという難点があった。Gougenheim は、つぎのような例をあげている。²⁾

Amour ne change point le cueur, mais le monstre tel qu'il est, fol aux fols, et saige aux saiges (Marguerite de Navarre, Heptaméron, 25, t. II, p. 112)

愛は人の心を変えるのではなく、それをあるがままに、狂人にあっては狂おしく、聖人にあっては聖なるものとして見せるのである。

上例で aux fols, aux saiges の aux は、“en + les” から来た aux と解釈すべきであるが、monstrer qch à qn の構文として、“à + les” ではないかと誤解される懸念がないわけではない。そこで登場したのが dans であった。1550年以前にはめったに見られない dans を、みずからの文学作品に取り入れたのはロンサールであった。Amours de Cassandre (1552), Odes (1550-56) でさかんに dans を用いたが、1567年以降になると、その乱用を悔やむかのように、作品の版を改めるに際して、dans の使用を le と les の前に限定するといった軌道修正が見られるという。²⁾

このようにして en は、フランス語の歴史の中で一部は à に、一部は dans に吸収され、その領分を縮めて今日に至っているのであるが、Grevisse は現代フランス語の en について、つぎのように要約している。³⁾

En は dans ほどには用いられない。多少なりとも固定的な表現中に現われることの多い en であるが、en の後続の名詞は限定詞なしのことが多い。特に定冠詞とは共起しない。(…) 定冠詞の中で l', la については成句として、また文語的表現の中に散見される。

Grevisse によれば、現代フランス語では、l', la に関しても en と共起する例は限定的というわけである。

4. 現代フランス語の en / à 交代にみられる史的痕跡

現代フランス語における en / à の交代をみると、われわれはまずそこに二つの前置詞の持つ意味の違いを求めがちであるが、交代の要因として、史的要素をも考慮する必要があると指摘したのが Molinier である。⁴⁾

en forêt de Fontainebleau / au (*en) bois de Boulogne ;
en son nom / au mien ; en son sein / au sein du groupe ;
être en son pouvoir / être au pouvoir de N

上記に含まれる au は、史的観点からみて en le N → au N という経緯から出たものと Molinier はみなす。さらに Molinier は、語彙によって en または à という異なる指向性があり、en 指向の語彙が au をとるとき、その下位構造には en の存在が認められると主張する。

au milieu de la pièce / en son milieu / *à son milieu
au sein du groupe / en son sein / *à son sein

au temps de mon grand-père / en son temps / *à son temps

上記において、定冠詞が求められるときは $\grave{a} + \text{le} > \text{au}$ とせざるを得ないが、限定詞が所有形容詞となって、 \grave{a} と en の選択の余地が出てきたときに、 \grave{a} を排除して en を指定するこれらの名詞 milieu , sein , temps は、本来 en を指向する名詞であって、これらの au の下位構造には “ en le ” があるとみなす。その一方で、本来 \grave{a} を指向する名詞は、 en には向かわない。

au sujet de Max / \grave{a} son sujet ; au commencement du monde / \grave{a} son commencement ; au sommet de la montagne / \grave{a} son sommet

上記の sujet , commencement , sommet などは、 \grave{a} 指向の名詞で、 au は “真の au ” であると Molinier は断ずる。このように \grave{a} と en の交代が、後続の名詞のいかんによって、その名詞のもつ語彙的特性として選ばれる限りにおいては、 \grave{a} と en の交代に意味の差を見い出すことはできない。しかし言葉を運用するとき、話者は後続の名詞を見きわめた上で、それが “真の au ” とか “見かけの au ” とかを意識しているわけではない。話者の注意は、 régime の位置にくる名詞の特性よりも、 \grave{a} と en の持つ意味の違いに向けられる。その結果、 régime の語彙の個性からくる拘束と、 \grave{a} と en の意味の差が複雑に入り組むことになる。そうしたものの多くは “慣用” とされるが、季節名の前に生ずる \grave{a} と en の交代はその典型であろう。

5. 季節名と \grave{a} / en

フランス語を学ぶ者は、季節名の前で前置詞が交代することを誰もが教えられる。

En hiver, été, automne / Au printemps, il fait beau.

やがて automne には、 \grave{a} l'automne もあると知らされる。同じ男性名詞である四季名—— automne は文語では稀に女性扱いされることもある——が、なぜ季節によって \grave{a} であり en なのか。定冠詞 le の存在が、 \grave{a} と en の選択に連動しているとみた M. Lerch は、 printemps のみが au となることについて、 $\text{printemps} < \text{prin} (< \text{ラテン語 } \text{primus}) + \text{temps} (\text{saizon の意})$ が [一年の] 最初の季節という合成語であるため、形容詞 prin が定冠詞を要求した結果であるとした。⁵⁾ しかしスウェーデンの女性言語学者 Fahlin は、 primus 起源の接頭辞を持つ他の語、たとえば中世語の $\text{prinsomme} < \text{prin} + \text{somme}$ “寝入りばな” は、初出は12世紀であるが、定冠詞なしの実例がいくつもあるとして、これを否定した。Fahlin によって、われわれは14世紀から16世紀にかけて、定冠詞のついた形 $\text{ou} (< \text{en} + \text{le})$ printemps とつかない形 $\text{en } \text{printemps}$ の両者が存在したことを実例によって知らされるのであるが、最終的には printemps も、 $\text{en le} > \text{ou} / \text{on}$ を経て、異なる前置詞 au にたどり着く流れの中で、現代語の $\text{au } \text{printemps}$ になったものと考えられる。

été と hiver は、中世語では en l'esté , en l'iver と定冠詞が保たれていた。しかしこれらは、遅れてフランス語に取り入れられた automne とともに、その一般的変遷 $\text{en l'~} > \text{en ~}$ を経て、現代語では定冠詞を放棄している。⁶⁾ これら三語に共通する母音字始まりという特長が、最終的に en に止まる契機となったわけで、 $\text{en enfer} - \text{au paradis}$ も同じ事情による。

文法家たちの論議的となっているもう一つの問題は、 $\text{en } \text{automne}$ に対する \grave{a} l'automne の存在である。Fahlin や Spang-Hanssen は、 \grave{a} l'automne は $\text{au } \text{printemps}$ からの analogie によって生じたとする。しかし通時的変遷と共時的意味を同じレベルで捉えようとする Molinier は、 au

printemps の au は本来 en+le のはずであるとして、そこから à l'automne を引き出す analogie 説には強く反対している。⁷⁾ けれどもそれを論ずるにあたっては、au printemps, à l'automne が現れる時期を資料の上で確認することがまず求められるであろう。

6. en / à+季節名の意味分析

- (1) Au printemps, les nuits sont fraîches.
- (2) En été, les nuits sont fraîches.
- (3) En automne, les nuits sont fraîches.
- (4) En hiver, les nuits sont fraîches.

(1)～(4)は、継続の状態を表す文であるが、(1)の au printemps は、前置詞が他と異なるにもかかわらず、(2)～(4)と同じ継続を表す文として容認される。ところでMolinierによれば(1)の au printemps は、実は歴史的観点からみればその基底には*en le printemps が存在する、だから表層がàであっても継続的な意味を表し得るのだという。⁸⁾

- (5) *A l'automne, les nuits sont fraîches.

(3)の「秋は、夜涼しい」と同じ内容を(5)に求めるとするなら、(5)は非文になる。Molinierは(5)について、「秋になると、秋がくると、夜涼しくなる」がもっとも自然な解釈であるとしている。en+無冠詞名詞が継続的・習慣的・非限定的・総称的な文と結びつくのに対し、à+定冠詞名詞は、点的で aspectuel・限定的・個別的な文意に傾く。

Quand est-ce que vous déménagez ?

- (1) Je déménagerai en automne.
- (2) Je déménagerai à l'automne.

Quand という問いに対して、(1)では「秋という季節内に」引っ越すのであるが、(2)では、「春や夏、冬ではなくて秋に」引っ越すと答えている。この区別を表層レベルではっきり区別できるのは automne だけというのが季節名の特異な点である。

- (3) Je déménagerai en été.
- (4) Je déménagerai en hiver.
- (5) *Je déménagerai à l'été.
- (6) *Je déménagerai à l'hiver.
- (7) Je déménagerai au printemps.
- (8) *Je déménagerai en printemps.

(8)にみられる en printemps は現代語では認められない。à l'été, à l'hiver も、例外的とされる。⁹⁾ ところで été や hiver に対しても、durée がテーマではなく、(2)の à l'automne のように、他との対比においてその夏〔冬〕をテーマ化する必要は起きないのだろうか。

(9) Max était déjà parti cet hiver quand son ami est passé à son domicile.

(9) にみられる cet hiver タイプについて、朝倉季雄氏はつぎのように述べておられる。¹⁰⁾

ce printemps, cet été, cet automne, cet hiver. 珍しく四つ揃ったが, ce printemps はまれ, -ci, -là を加えても事情は同じ。

été, hiver について季節そのものをテーマ化したい時, 上記のような前置詞抜き, 指示形容詞付き表現はその選択肢のひとつといえよう。

7. 国名・大陸名・島名と à / en

Molinier は, 国名の前につく à と en の分布も, 基底には等しく en があるものとみなし, 季節名と同じく, en+le>au となった歴史的変遷の痕跡であると結論づけている。¹¹⁾ 確かに, 男性国名は原則として à, 母音字始まりの男性国名と, 女性国名には en という分布は, 季節名の場合と共通している。

Il est (au+*en) Japon, (*à l'+en) Iran / en Angleterre, en France.

しかし現代語の運用にあたっては, 歴史的変遷がどうであれ, à と en に, 現代語としての意味の違いを感じたとしても不思議ではない。領土としてみた国名は季節名とは異なり, 具象物であるだけに, そのとらえ方もより具体的になる。à には点を, en には内部すなわち広がりを見る。けれどもこれに文法的拘束を重ね, 遠い国がすべて男性名詞で, 近い国ならばすべて女性名詞かという, なかなかそうはいかない。その上, 発話者の視点を固定してしまうことも不自然である。こうした状況のもとで, かつてのフランス語は, 現代フランス語よりも多くの自由を享受していたようである。1876年に Littré は, 現代フランス語にみられる en, au, aux の原則を述べた後で, “しかしながら, 男性名詞であっても en Portugal, en Danemark, en Béarn と言う。かつては [名詞の性による] à と en の使い分けはなく, aller à l'Amérique と言っていたし, [今では] aller en Chine が好まれるようになってきてはいるものの, aller à la Chine という表現もまだ残っている” としている。¹²⁾ また Gougenheim は, 18世紀初頭に出版された Dictionnaire de Trévoux に記されている例として, 「通常は à la Chine と言うが, かの地で暮らしている宣教師たちは en Chine と言っている。」という説明を紹介している。¹³⁾ Grevisse は, ルソーが à l'Amérique と書き, Claudel や Etienne が à la Chine と記している例を取りあげて, これは20世紀における archaïsme であると断じている。¹⁴⁾ 複数国名に関しては, aux に統一されて選択の余地がないため, 論じられることが少ないが, 複数国名はより広がりを感じさせるものだけに, en ~s もあってよいと思われるが, そうした報告例はない。

つぎに島の名称についてみてみよう。群島として複数扱いをうけるものは, aux+島である。Aux Antilles (アンティル諸島で), Aux Philippines (フィリピン諸島で) ——国名は République des Philippines フィリピン共和国——など。単数名では, 都市名のように通常無冠詞扱いのものと, 冠詞をとることのできるものとに分けられる。無冠詞のものとしては, à Chypre, à Cuba, à

Madagascar, à Malte, à Samos, à Java, à Bornéo, à Sumatra など。これらのうち Malta までの四島は、いずれも独立した共和国である。*Grand Larousse Encyclopédique* を繙くと、République や île という女性名詞からの類推であろうか、説明文中では、Bornéo と Sumatra が男性で、残るすべての島は女性扱いになっている。冠詞をとり得るものでは、女性の島名は en をとる。En Sardaigne, En Sicile, En Corse, En Islande, En Irlande など。しかし女性島名でも、遠くて小さな島には à la を用いる。à la Réunion, à la Martinique, à la Guadeloupe, à la Jamaïque など。国名と異なる点は、無冠詞扱いの島が多く、これらは都市名と同じく à をとること、冠詞をとることのできる女性島名では、島の大きさによって——この基準は主観的で曖昧であるが——à と en に分かれることである。

国名をめぐる前置詞 à / en の交代は、歴史的変遷の上に意味解釈が重なることにおいて、季節名の場合と相通ずる様相を呈している。

8. à をめぐって

前置詞 à は、2. で述べたように、被制辞名詞を点としてとらえるが、三次元的な dans のように、さらに分析的にとらえることはしない。そしてこの性質が、一定の分野内のいくつかの選択肢からひとつを選ぶ、という役割に対して有効に働く。つぎの例を見てみよう。

- (1) Je déménagerai en / à l' / automne.
- (2) Je déménagerai en / au mois de / mars.
- (3) Où habitez-vous ? — J'habite *Shibuya / à Shibuya.

(1)(2) で en を使えば、“秋という季節内、三月という月のうち”に引っ越すのであるが、à にすると、他の季節、他の月との選択の中で選ぶことになる。(3) の文の動詞 habiter は、J'habite φ / à Shibuya と、前置詞がついたりつかなかったりで、その意味の違いがよく議論的となるが、場所を問う質問に対する答えの文では、à は不可欠である。“いくつかの選択肢を形成して、その中の一つを指示する”性質は、複合語にあっては、Cadiot が分析したように、下位分類の機能をはたす。¹⁵⁾

- (1) salade (au+de) thon
- (2) crêpe (au+de) sarrasin
- (3) un verre (à+d') eau

(1) についてみると、salade de thon マグロ入りサラダに対して、salade au thon は、マグロサラダというサラダの種類を意味している。salade de thon において、マグロは量的現実味を帯びているが、salade au thon では、様々な種類のサラダの中のマグロサラダであって、マグロの量がほんのわずかでもマグロサラダとすることはできる。à はこのように、ひとつのカテゴリーの内部を仕分け分類することに資するのであるが、逆に à と共起するかどうかによって、その名詞が共通の範疇に属するかどうかを推しはかることもできよう。『現代フランス前置詞活用辞典』には、つぎのような記述がみられる。

“…chambre, bureau (書斎), couloir, escalier はかならず dans を伴う。(…) これに対し, cuisine, salon, salle de séjour, toilettes, entrée, cave, grenier は, à, dans のどちらにも使える。但し, 話し手が家の中にいる時に限る。”¹⁶⁾

種別化に向かう à に対し, dans は場所そのもの, また外部との対比における内部を意味する。家の各部を種別化するとはどういうことか。それは各部の機能・役割を対比的にとらえることになる。なぜ種別化に適さない語があるのか。chambre は本来個室で寝室となり, “公共”の役割はない。couloir, escalier は, 独立した部屋ではなく通過場所である。bureau には, ①事務机, ②「家の中で, 事務機の置かれている」書斎, ③「職場としての」事務所, オフィスというふうに異なる意味がある。家の中にいる人について, X est à son bureau. と言えば, 「X は机に向かっている, 仕事である」となる。また「職場で仕事」ならば, X est au bureau. である。他方 X est dans le bureau. においては, 家の中で X のいる場所を特定はするものの, それ以上のことは語らない。bureau の持つこうした多義性が, pièce としての bureau を, たんなる localisateur として働く dans に結びつけるのかもしれない。

à, dans のどちらにも使えるとされた語についてみると, entrée「玄関」は機能としては, couloir, escalier と同じ通過場所である。インフォーマントによると, à l'entrée では, X はまだ外の「玄関先にいる」のであって, dans l'entrée ではじめて屋内の「玄関にいる」のだという。また, à la salle de séjour は容認できないとするインフォーマントが多い。salle de séjour が英語 living-room の翻訳語であることは周知の事実であるが, そのために salon と同等に扱われないのではない。家の各部の名称が種別化の一コマとなる時, それは“家族にとって, 開かれた場所”であることが前提となるのかもしれない。その意味で, cave や grenier は, そこでは物が主役であるだけに, 人にとっては少し異質な空間である。¹⁷⁾ つぎに, 動詞 aller に続く副詞句の表れ方について, 『現代フランス前置詞活用辞典』から引用してみよう。

Chaque dimanche soir, nous allons dîner

- (1) dans un petit restaurant français, à Shibuya.
- (2) dans un restaurant.
- (3) au restaurant.
- (4) dans le restaurant “Eau Claire”.
- (5) au restaurant “Eau Claire”.
- (6) dans le restaurant français qui se trouve près de la gare de Méjirō.
- (7) au restaurant français qui se trouve près de la gare de Méjirō.

日曜日の晩はいつも

- (1) 渋谷の小さなフランス料理のレストラン
- (2) (何をするかという) レストラン
- (3) (自宅ではなく) レストラン
- (4) (5) レストラン「オ・クレール」
- (6) (7) 目白駅の近くにあるフランス料理のレストラン
に行き食事をする。¹⁸⁾

à と dans の基本的な差は, à は「(自宅ではなく) 外で食べる」にたいし, dans は食事をする場

所そのもの——座る場所が快適か否かなど——をテーマにしている。したがって(2)のように、restaurantの特長を示すいかなる付加辞もつかない文は、不自然とみるインフォーマントが多い。

(4)(5), (6)(7)についても、dansを含む(4)(6)は、場所を示してみせるのみであるが、(4)はレストランの名前が特定されているせいであろうか、(5)に比べて不自然とする向きが強い。àを含む(5)(7)は、「外食する」という様式に加えて、場所の特定という二つの要素を含意している。

àとdansのうちで、どちらの前置詞をとるかは、後続の名詞によっても微妙に違ってくる。ある初級教科書の語彙欄に、つぎのような表現が並んでいた。

aller au cinéma
au restaurant
dans une discothèque

discothèqueは、若者たちが踊りにいくディスコである。インフォーマントによると、aller dans une discothèque, aller en discoは可能だが、aller à la discothèqueとは言わないという。この言葉は比較的その成立が浅く、ディスコに行くのは一般に若い人に限られるために、cinémaやrestaurantほどには分野の一つとして様式化していないためと思われる。

9. àとdansについて

ある名詞が、談話や思考の中でどういうレベルでとらえられているか、また名詞の限定詞がどういう回路で選ばれるかということは、冠詞論が扱う分野であろう。しかし名詞のとらえ方と連動して前置詞が交代するとなると、これは前置詞の問題にもなり得る。名詞の表出のされ方を、1)様式化・抽象化と、2)個別化・具象化とに二分すると、1)で限定詞としてまず考えられるものは、定冠詞の単数である。2)では、状況により様々な限定詞をとる可能性がある。場所を表す前置詞à/dans Nにおいて、à NのNは、1)と2)の両方の可能性がある。たとえばNが固有名詞ならば2)となるであろう。他方dans NではNはすべて2)となる。dans Nの中で、Nは常に、談話の現実の中で存在感を持った名詞として表出される。様式化された表現でも、dansが出ると、場面指定的な方向に傾く。

- (1) Prière de jeter les ordures dans les poubelles.
ゴミはゴミ箱に捨ててください。
- (2) Jette ces pelures dans la poubelle.
この皮をゴミ入れに捨てて。
- (3) Jette-moi cette lettre dans le / ce panier.
この手紙をそこにある／その／くずかごに捨てておいてくれ。
- (4) Jette-moi cette lettre au panier.
この手紙を(どれでもいいから)くずかごに捨てておいてくれ。¹⁹⁾

(1)は、公共の場での貼り紙のような、非常に没個性的な表現である。ゴミ箱も複数用意されていて、「他所ではなく、ゴミ箱の中へ」と、dans les poubellesに焦点を当てた表現である。(2)

は、ces pelures とあるように、捨てる物も具体的であり、poubelle も現にそこにあるものの中に、と指示している。(3) は(2) と同じく、手紙もゴミ箱も目の前にある。(4) は、“この手紙はくずかご行きにする、捨てることにする” のであって、au panier の panier は現実にはそこになくてもよい。dans が現実対応の表現であることは、つぎの例を見てもはっきりわかる。

(1) Mettez cette lettre dans une enveloppe.

この手紙を封筒に入れてください。

(2) Mettez cette lettre sous enveloppe.

この手紙を封筒入りにしてください。

(1) では、「封筒に入れる」という行為そのものを意味するのに対し、(2) では「封筒入りにして(送る)」という様子を指示している。(2) は、sous enveloppe と、N が無冠詞となり、N の無標化、非指示的 non-référentiel な表出も文意に対応している。

10. en をめぐって

en は à と dans に比べてどう違うのか。

(1) Où est maman ?

- a. Elle est dans la cuisine. 彼女は台所にいる。
- b. Elle est à la cuisine. 彼女は台所で料理中だ。
- c. *Elle est en cuisine.

dans は場所を、場所のみを指示するのにたいし、à は場所を示すことによって、その場所に結びついた活動を表すことが可能である。à と en の違いはなにか。c. における en cuisine を生かすやり取りとしてはつぎのような対話が考えられる。

(2) Qu'est-ce qu'elle fait ?

— Elle travaille en cuisine. 彼女は台所仕事をしている。

X à Y においては、場所 Y から出発して X の状態をも示唆するが、X en Y は、X の状態を正面に示す。X à Y においては、コンテキスト次第で Y は指示的にも非指示的にもなるが、X en Y では、限定詞なしの Y は非指示的傾向が強い。様式化した以下の動詞表現中の Y はすべて non-référentiel である。

travailler en usine 「工場勤め」、mourir en prison 「獄中死」、vivre en ville 「都会暮らし」、vivre en appartement 「アパート暮らし」など。

X en Y が談話の中に現れる場合、X の特性があらかじめ固定されているならば、(1) — c 型の対話も可能なようである。

(3) Où est-il ?

— Il est en cuisine.

(4) Où est-il? — Il est en mer.

(3) の対話がレストランの作業場内での対話で、主語がコックならば、「今料理中だ」となる。
(4) でも、主語が漁師ならば、「今出漁中だ」となり、自然な対話になるという。上述の(1) — b との違いは、X en Y では、Y が主語 X の特性と分かち難く結びついていることである。また、X en Y における X-Y の結びつきは、X がある種の Y を指定するときに en Y が受け入れられるが、指定外の Y については、他の前置詞が選ばれる。

(5) Le pêcheur [marin] meurt en mer, dans une rivière, dans un lac.
? en rivière.
? en lac.

(6) Le touriste va [est] à la mer.
*en mer.

(7) Le touriste meurt *en mer.
dans la mer.

pêcheur や marin の内面的意味と結びつくのは mer であって、rivière や lac は除外される。したがって、漁師や水夫は「海難死する」が、「*川難死」や「*湖難死」はせず、「川で、湖で死ぬ」。また、観光客は「海に行く」が、「海に出る」ことはなく、「海難死」はせずに「海で死ぬ」。

ところで dans の具象性が不動のものであることはこれまでみたとおりであるが、en はその対極に位置し、à はどちらかといえば en の側に傾く。その性質を利用して、en と à は、より洗練された表現として dans に代わり、文体的、文学的效果を発揮することもある。

Cervoni は、Verlaine の詩の一節をとり上げ、en la chambre という表現に対する C. Guimier の解釈を紹介している。²⁰⁾

“Et l’affreux brouillard refluit,
Jusqu’en la chambre où la bougie
Semblait un reproche muet...”

「dans の代わりに en を用いることは、入れ物と内容物の結びつきに、客観的現実の中ではそれが有していない性質を与える。en によって、入れ物に固有の境界がぼかされ、二つの要素が一つになって、それぞれの構成部分が判別できなくなるのである。」

つまり Guimier によれば en の一般的な価値は、「内包操作の脱物質化 dématérialisation de l’opération d’intériorisation」ということになる。Cervoni は、dans の代わりに en を好んで使った作家としてゴンクール兄弟をあげている。

文体的効果をめぐることは、à も dans の代わりに使われることがあるという。

“Lorsque la pluie en courtes aiguillettes rebondit aux prés saturés, une naine amphibie,
une ophélie manchotte, grosse à peine comme le poing, jaillit parfois sous les pas du poète

et se jette *au* prochain étang.”

(Francis Ponge, *La grenouille*, dans *Pièces*, NRF, Poésie/Gallimard, p. 54)

二箇所のàを、それぞれ dans [sur] les prés, dans l'étang と入れかえてみるだけで、àによってテキストに付与される詩的なものを理解できるはずだ、と Cervoni は言う。à の多義的で、軽やかで、最小限のものしか表出しない特性が、他の語を自由に振る舞わせるという。²¹⁾

11. 結び

en / à / dans の交代に関連する様々な要素をみてきた。1) 歴史的変遷の中で作られた枠組み、2) 文脈から離れた位置で、それぞれの前置詞に内在する意味、3) 文脈にとり込まれた時に各前置詞がはたす役割、4) 文体効果など、これらが交代を促す要因となる。ことばの現実を理解するためには、こうした要因を柔軟にとり入れて考察する必要がある。また régime となる名詞は、それぞれフランス的文化を担わされていて、家の部分の名称でみたように、名詞を入れ替えただけで規則性が利かなくなってしまうことも珍しくない。全体的な流れとともに、こうした個々の語彙の特長を把握することも、多様なことばの現実を理解するには欠かせないことである。

(註)

- 1) 本稿をまとめるにあたっては、Franche-Comté 大学教授 D. Lebaud 氏に有益なコメントやアドバイスをいただいた。ここに記して感謝したい。
- 2) GOUGENHEIM (1951) pp. 165–166
- 3) GREVISSE (1986) p. 1528
- 4) 以下 MOLINIER (1990)
- 5) 以下 FAHLIN (1942) pp. 108–110
- 6) automne は、12, 13世紀にラテン語の autumnus からじかに借用されたもので、古くは gain 「収穫の時 (<gagner)>」 が秋を表すことばであった。
- 7) FAHLIN (1942) p. 115 ; SPANG-HANSEN (1963) p. 196 ; MOLINIER (1990) pp. 46–47
- 8) 例文 (1) ~ (5) は MOLINIER (1990) pp. 47–48 による。
- 9) GREVISSE (1980) は、 “On dit aussi assez souvent à l'automne, plus rarement à l'été, à l'hiver” (p. 1528) として、à l'automne, à l'hiver, à l'été を含む文例をそれぞれ 6 例、2 例、1 例あげている。
- 10) 朝倉季雄 (1984) p. 61
- 11) MOLINIER (1990) p. 47
- 12) *Encyclopédie du bon français dans l'usage contemporain*, T. I, p. 4
- 13) GOUGENHEIM (1966) p. 307
- 14) GREVISSE (1986) p. 1530
- 15) CADIOT (1997) p. 96
- 16) 『現代フランス前置詞活用辞典』 p. 131
- 17) cave と grenier については、MATSUDA (2000) p. 225 で論じた。
- 18) 『現代フランス前置詞活用辞典』 p. 128
- 19) Ibid., p. 138 による。
- 20) CERVONI (1991) pp. 269
- 21) Ibid., pp. 267–268

(参考文献)

- CADIOT, P. (1997) : *Les prépositions abstraites en français*, Armand Colin, Paris
- CERVONI, J. (1991) : *La préposition —Etude sémantique et pragmatique—*, Duculot, Paris
- FAHLIN, C. (1942) : “Etude sur l’emploi des prépositions *en*, *à*, *dans* au sens local”, Almqvist & Wiksells, Uppsala
- FOULET, L. (1965) : *Petite syntaxe de l’ancien français*, Honoré Champion, Paris
- GOUGENHEIM, G. (1951) : *Grammaire de la langue française du seizième siècle*, IAC, Paris
- (1983) : *Les mots français dans l’histoire et dans la vie*, Tome I, 2^e éd., A. & J. Picard, Paris
- GREVISSE, M. (1986) : *Le bon usage*, Duculot, Paris
- MATSUDA, T. (2000) : “L’alternance prépositionnelle entre *A* et *DANS* dans la construction *Verbe Préposition Groupe Nominal* (Groupe nominal = nom de lieu)”, *Annual Report—Humanities and Social Sciences—* (Otsuma Women’s University) Vol. XXXII, pp. 222–230
- MOLINIER, C. (1990) : “Les quatre saisons —A propos d’une classe d’adverbes temporels”, *Langue Française*, N° 86, pp.46–50
- SPANG-HANSEN, E. (1963) : *Les prépositions incolores du français moderne*, G. E. C. Gads Forlag, Copenhagen
- Dictionnaire historique de la langue française* (1994), Dictionnaires le Robert, Paris
- Encyclopédie du bon français dans l’usage contemporain*, T. I, (1972), Trévise, Paris
- 朝倉季雄 (1984) : 『フランス文法メモー基本語の用法—』, 白水社
- 小熊和郎 (2000) : 「前置詞 *en* の制約と働き」, 『フランス語学研究』(日本フランス語学会) 第34号, pp. 50–55
- 『現代フランス前置詞活用辞典』(1983), 大修館